

〈私の研究〉

ローマ史—皇帝セプティ
ミウス・セウエールス—
を学んで

太田 信 幸

なぜ歴史を学ぶようになったのか、その動機は人様々である。私の場合、セプティミウス・セウエールス L. Septimius Severus (在位一九三—二一一年) をテーマとして選ぶようになったのは、一冊の本からであった。文化史在学中、私は浅香正先生の指導を受けていたが、大学院に入ってから、今までのテーマを続ける気持ちで薄れ、何を新しく選ぶか色々迷っていた時があった。ローマ史の大家、ロストフツェフの『ローマ帝国社会経済史』等を読み何かを見つけたようとしていた時、先生が教えて下さった一冊の本が、その後の方向を決定することとなった。それは、A. E. H. Jones というイギリスのローマ史家が書いた

た Septimius Severus—afrikan emperor— (London 1971) という本であった。

この本によってセウエールスに対する関心が高まってきたが、その後一九七四年に初めて行ったヨーロッパ旅行が、ローマ史全体に対する愛着をはっきりした形にさせたいと思う。地中海、そしてローマの遺跡、特にフォロ・ロマーノを初めて見た時の感傷は今でも忘れることが出来ない。やや感傷的にすぎるとは思うが、廢墟の中に立つセウエールス凱旋門によって、セウエールスの生きた時代に対する関心が明確になったように思う。あるいは地中海の青さから地中海世界に対する親しみ、恋いこがれにも似た感情が生まれたとも言える。

ローマ史と言えば、ごく一般的にはイタリアが中心と思われている。もちろん首府はローマであったが、広く地中海全体がその支配下に置かれている。この大帝國ローマが大きく変動を経験してゆく時代に位置する重要な人物の一人がセウエールスであった。皇帝自身、我々にとってなじみは薄いかも知れないが、公共浴場を建てたことで有名なカラカラ帝の父親と言えばある程度わかるのではないだろうか。彼の生涯を一瞥すると非常に興味深い。まず生まれは属州アフリカのレプティスイ・マグナ(リビア)であった。成長してローマに移り元老院議

員として各地の官職を歴任する。主な地域を述べるならば、バエティカ(スペイン)、ガリア・ルグドゥネンシス(フランス)、シリヤ(イタリア)、シリヤ等である。そして一九三年、当時パノニア(オーストリア)ユーゴスラヴィアの総督であった彼は、その地のカルヌントゥムで軍団により皇帝位に宣言され、ローマに進軍して正式皇帝となったのである。以後ほとんどローマに滞在せず、帝國各地を転戦し、二一一年遠征中のブリタンニア(イギリス)のヨークで死亡している。

以上からわかるように、彼はローマ帝國全体にわたってその足跡がたどれる人物であり、イタリアのローマではなく地中海のローマを強烈に印象付ける人物である。ローマ帝政期の変質過程に大きな影響を与えた人物であることにまちがいはなからう。このように特異な地点に位置するところから、アフリカ出身者として最初に皇帝になった彼の在位中の様々な政策については、その評価が大きく別れている。今まではセウエールスの生涯に中心をおいて勉強を進めてきたが、今後は彼の行った軍制改革をはじめとして、広くセウエールス朝全体のローマ史における位置付けを試みなければならぬと考えている。

(女子中高教諭・社会科)